

2024 年度開催 第 12 回大谷大学文藝コンテスト

にんげん部門 総評

審査委員長 井上 尚実

昨年度までの「親鸞部門」という名称から「にんげん部門」に変わり、より幅広く自由なテーマを選んで、思ったこと感じたこと（「随想」エッセー）を書いていただけるようになりました。「にんげん（人間）」についてのエッセーというと、自分が何をテーマに選んで書きたいかというところから考える必要があるのでは、戸惑うところもあるのではないかと少し心配しましたが、大勢の中学生・高校生から応募がありました。ありがとうございます。高校生の部に 2,836 作品、中学生の部に 437 作品という多数の応募があったことは、とても喜ばしいことです。応募してくださったすべてのみなさんの執筆の努力と豊かな表現力に敬意を表します。大谷大学の仏教教育センターに所属する教員を中心に、全作品をしっかりと味わいながら読ませていただきました。

「にんげん（人間）」について、みなさんが選ばれたテーマをみると、自分自身のこと、祖父母や両親や兄弟のこと、友人のことなど、身近な人間関係や出来事を通して感じたり考えたりしたことが取り上げられており、どの作品にもそれぞれの作者が人間として生きることへの思いが表現されていました。特に入選した作品には、自分の感じ方や考え方に大きな変化をもたらした人との出会いや家族のことが語られているものが多かったように思います。考えながら書くということを通して、ふだんの生活では見過ごしてしまいがちな大事なことに気づくことができたのではないのでしょうか。

パソコンやインターネットが発達し、スマートフォンが普及したため、ゆっくり立ち止まって一つのことを考えたり、細部までじっくりと味わったり、自分の思いや感情を文章にして原稿用紙に書き表すような機会が少なくなっているのではないのでしょうか。日記のように毎日ではなくとも、考えたことや感じたことを短いエッセーに書いてみる習慣は人の心を豊かにすると思います。入賞した作品には、書くことを通して深まった自らの思いが、多くの人と共有できるような形で表現されています。

「〇〇〇をテーマにした 800 字のエッセー」と言うように、インターネット上の生成 AI に指示を出せば、それなりに「作品」らしい文章が瞬時に出来上がってくる時代ですが、

ほんとうに大切なのは、出来上がった「作品」よりも、自分の経験や思考や感情を、自分のことばで苦労しながら文章に表現していくプロセスです。「書く」という行為は、時間がかかって少し面倒なところがありますが、書くことを通して考えさせられ、気づかされ、経験や思いが深まるところに意味があるのだと思います。スマートフォンを使う時間を少し減らして、たまにはノートに鉛筆でエッセーを書いてみるというのはどうでしょうか。ゆっくり時間をかけたアナログな営みにこそ、人間の豊かな創造性が発揮されるのだと思います。